

自給飼料作り体験記

大分県西国東郡真玉町城ノ前

小 弘 勇 (六十四才)

わが国^{シマツキ}東半島は全国でも屈指のミカン適地として農林省より折紙付の立地条件で、町の特産課はもとより県一体となって構造改善事業の一端として目下脚光を浴び、ミカンブームの波にのって到るところに近代的ブルドーザー開墾でもって開畑され次々とミカンが植付けられつつあります。更に新年度より国の指定によりパイロット事業を二百丁歩余の開墾に着手する様当局としては測量等も終わり四十年より工事に着手する体制も出来た様子で、この事業完成の暁には当地の山々も見渡す限りの草地やミカン園と変わり酪農や果樹園にて前途洋々たる近代的営農も期待出来ることでありましょう。

夏枯れでまめ科の消失した地区も出来ましたので、昨年はそこに西南暖地でも全く夏枯れを知らぬダリスグラスを試作いたしましたので部分的ながら発表いたします。写真は十月最終刈取後再生したものを十二月撮ったもので、段々畑の両側にケンランドクロバールとアルファルファ白クロバールに適度のダリスグラスを混播した状況で、ダリスグラスの多過ぎ(厚播)は他牧草を圧倒しますので必ず薄播きが肝心です。七月の三回刈取時には、赤クロバールと白クロバール一色でしたが、四回目の刈取りはダリス本位かと思いましたが現在のところ涼しくなるにつれて再びクロバール類が多くなってまいりました。写真2の中央部ミカン植付予定区にはアルファルファを主

体としております。ミカン植付予定場所は牧草山積みを埋込んであります。アルファルファは十月に倒伏して株元より新芽を出しつつありましたが、一月現在のこの写真では再び草生回復し、春が待遠しい状態です。今一つ夏枯れに強い牧草の一つにトールオートグラスがあります。この牧草も年中青々として四、五、六月には刈取最盛期に達します。播種の時期は三、四月頃が最適ですが当地は必ずその頃は春雨がしとしと降るので発芽には好都合です。播種は乾燥した時にやっておくと、作業も楽だし



写真1



写真2

一雨にて良く発芽します。追肥としては苦土石灰を春秋二回撒布し、高度化成を春夏秋三回施肥します。飼料用でしたら刈取毎に施肥すれば、更に大量の牧草も取れるでしょうけれど、私のは肥料用として埋込み土地を肥す目的でつまり維持肥料として考えております。トールオートグラスは中間型の生育熟期の様で、当地の夏枯れ地区では優秀な生育を示しています。そこで刈取期ですが、少し早目に刈る事です。アルファルファなどは倒伏し易いので倒伏しないうちにアオガリーで刈取れば面白い程能率が上がります。段々畑を両側より刈よせ、中央部で半乾し写真の様に植穴部に山積みしておきます。下積の部分は良く腐敗(埋肥醗酵)して土は黒く見るからに何を植えても素晴らしく生育しそうでミカンの植付けも待遠しく目下自家生産の良く成る木のみ穂木を取り接木仕立中です。自家生産苗は優良なものだけを選んで植付けられるので有利です。この草地を利用して畑地につき、飼料を少し加えたら乳牛の三頭は楽に飼えるから緑肥文では惜しいと近くの酪農家は申して居ります。後日私も酪農経営のため、エンバク、マンモスイタリアン、C・O、飼料かぶ、デントコーン、ソルゴー、スーダングラス、ボンキン、家畜ビート等も年中試作して肥育牛に利用してまいります。酪農も飼料作りには自信が出来てから始めてもおそくはないと思います。無論家畜の衛生方面も色々研究せねばなりません。乾草作りを含めた飼料作りが大切と考えております。

土地作りはまめ科牧草に限ると思いませんけれど将来酪農と果樹の二本立ての経営を目標にしているため、いね科牧草についても試作栽培中です。前記ダリスグラスの栽培にあたり心すべきは早刈りすることです。刈りおけると家畜の嗜好も悪くなるし、尚また種子が落下して密生し他牧草を圧倒してしまいますので刈取には種子を落とさぬよう早刈りし、必ず穂を切取って圃場外に出す事です。また夏枯れ地区にはアルファルファに勝るまめ科牧草はないでしょう。「牧草と園芸」誌の「ルーサンをもつと利用しよう。」十巻九号の記事を参考にして各種のルーサンを試作中ですが、暖地向

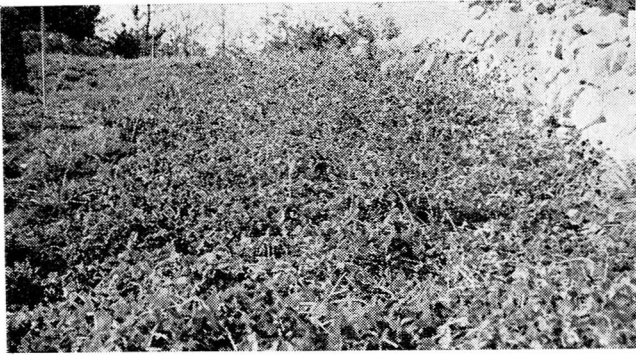


写真 3

次の写真3は、三十九年一二月に開墾し、すぐ熔燐と苦土石灰をすき込み中央部にアルファルファ、外側にアルファルファとラデノクロバを混播し、内側にケンランド赤クロバとラデノクロバを混播した畑の内側の状況です。不毛の原野もこんなに赤クロバが良く育つようになり我ながら感心しているところです。オーチャードも少し入れてありましたが、日照りの良い地区は殆ど消失して僅か点々と残る程度です。当地ではチモシーやオーチャードグラスなど北方型の牧草は夏枯れがひどく思わ



写真 4

品種はウイリアムズブルグ、ナラガンセツト、アトランチックなどいずれも良く生育しており、素人目にはちよつとどれがどの品種か見分けもつかぬぐらいの上々の成績です。目下のところ永年生は確実ですが幾年続かが問題で知りたいところですが、その節は追播か更新によって他牧草と切替える要領が今後の研究課題だと思っております。



写真 5

しくありません。従っていね科ではダリスグラスとトールオートグラスを取り入れるのが現在のところ良いと思っています。もともとこの土地は原野であって、野草も刈り取れぬ荒地でしたが、土地改良を以降雨前に施肥してアルファルファにはルーサン根粒菌をまぶして播種鎮圧します。条播でしたら足にて軽く踏む程度で土地の良く乾いている時期を見計らって作業することです。このように年中青々と良質の牧草がこの荒地でも取れるとは今迄考えも及ばなかったことであって今後ミカン作りに及ぼす好影響と生産費の切り下げは近い将来可能だと思ふ時県下でも勿論、先進地にも未だ多く見聞しないだけに盤石の構えが出来つつあるものとまことに心強い次第です。ミカン植付分の牧草は四、五回刈して全量敷草として用い、写真5の様に土壤水分の調節に役立たせており、未植地は全量緑肥鋤込みです。四十年はブルドーザー開墾地に六〇畝の内側にケンランドクロバ

1、ラデノクロバ、アルファルファの混播をして外側にトールオートグラス、ダリスグラス混播を試みる予定です。当地の秋播は虫害による被害を受け易いので、春播の方が安全です。前記の外にバヒヤグラスも試作中ですが、土地柄によるのか、収量も多く期待できず、法面の土止め程度には最適でしょう。いわゆる地上茎というか匍匐茎がグングン張出して土地を固めます。近隣の開拓者、酪農家もそろそろ牧草の良さを認識して来春の牧草種子購入量もかなりなものになるかと思ひます。ミカン園の両側に牧草を取入れる事によって雑草を抑え、刈草により敷物(マルチ)は豊富となり、地力は増進し、一挙兩得です。更には土壤侵蝕、流亡をも防ぎ有機物大量投入によりますます地力は増進し生産コスト切下げにも一役買つて、今後の成績が期待されます。

先般県の農事試験場の先生方が当地一帯(ミカン園)の土壤調査に参り、草生栽培の良さを提唱された由で尚一層心強く感じしております。

以上老齢の開拓一農夫がなれぬ手つきでめつたに取らぬベンを走らせ、今までの体験を綴ってみました。前記の通りこれだけの草生栽培で乳牛の二〜三頭は飼えるぞとの言葉に励まされ、更に果樹栽培と酪農経営の結びつきを目下研究中であります。あまり充分意を尽せませんが、今後一層牧草と園芸で得た知識を生かして実地に適した経営を行ない、更には近隣の方にも良い点を拡めて共に栄えるよう努めてゆきたいと思っております。